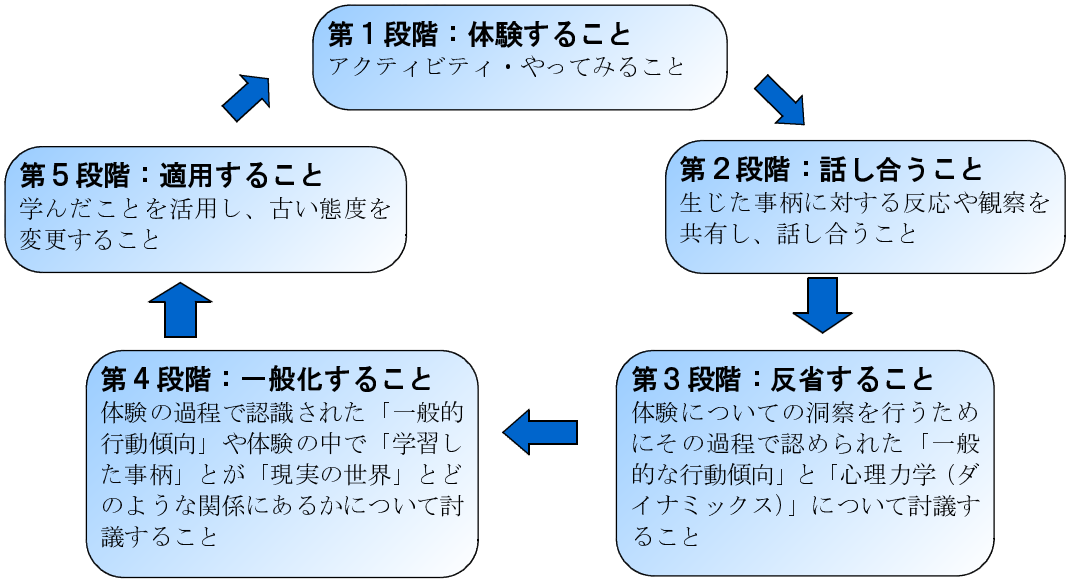
参加体験型学習の指導方法の在り方

子どもたちの自尊感情を醸成したり、集団づくりを進めたりするためには、日々の取組の積み重ねが何より大切です。その上で参加体験型学習を取り入れることは、一定の効果があると考えられます。参加体験型学習は、子どもたちが主体的に学習活動に参加し、「頭」「心」「身体」を使って協力的に活動し、体験することによって、人権感覚や人権意識、コミュニケーション技能等が身に付くきっかけとなるものです。

実際にこの取組を進める際には、「人権教育の指導方法等の在り方について［第三次とりまとめ］」にある次の図の学習サイクルに従って行うことが大切です。

「体験的な学習」に関する学習サイクル



上図における第１段階の「体験」は、必ずしも現実的な体験だけを意味するわけではない。むしろ、明確な目的意識の下に考案された学習活動（アクティビティ）に取り組むことによる疑似体験や間接体験をすることも含まれる。そこでは、ロールプレイング、シミュレーション、ドラマなど、多種多様な手法が用いられる。「体験的学習」のねらいは、「体験」を単なる「体験」に終わらせるのではなく、「話し合い」、「反省」、「一般化」、「適用」という具体的、実践的な段階を丁寧に踏むことによって、体験した事柄を内面化し、自己変容へと結びつけさせることにある。

（［第三次とりまとめ］より）

ここでは、小学校低学年向け参加体験型学習「ふわふわことばをふやそう！」を例にして、上記の学習サイクルを説明します。

ふわふわことばをふやそう！

◆目　　的　・ふだんの生活の中で使う言葉を意識する。
　　・あたたかい言葉がけができるようにする。
◆学　　年　小学校低学年～
◆所要時間　４５分
◆準 備 物　ワークシート

進め方

① ふだんの生活の中で、誰かに何かを言われていやだったことはなかったか、ふり返る。また、そのとき、どんなことを言われたのかワークシートの１の欄に記入し、話し合う。【第１段階】
　※子どもたちが発表した言葉を黒板（模造紙）にまとめて書く。

② そのような言葉を言われたとき、どんな気持ちになったのかについて話し合う。【第２段階】
　※言われていやな気持ちになる言葉を総称する言い方を考えて○○○○の中に記入するのもよい。

③ ふだんの生活の中で、誰かに何かを言われてうれしかったことはなかったか、ふり返る。また、そのとき、どんなことを言われたのかワークシートの２の欄に記入し、話し合う。【第１段階】
　※子どもたちが発表した言葉を黒板（模造紙）にまとめて書く。

④ そのような言葉を言われたとき、どんな気持ちになったのかについて話し合う。
　※言われてうれしい気持ちになる言葉を総称する言い方を考えて○○○○の中に記入するのもよい。【第２段階】

⑤ 黒板を見ながら、友だちに言われたい言葉はどちらなのかを、その理由も含めて話し合う。【第３段階】

⑥ 話合いを通して、思ったことや感じたことをワークシートの３の欄に記入し、発表し合う。【第４段階】

発展

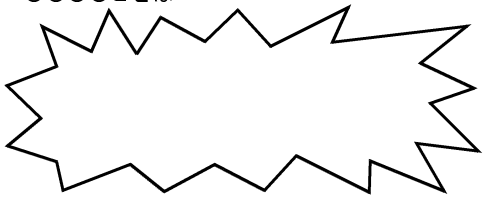
・ 子どもたちから出された言葉をまとめたものを教室内に掲示しておき、もめ事がおこったときなどに、話し合ったことをふり返らせるのもよい。【第５段階】

子どもたちは、それぞれの段階において周りの子どもの意見や気持ちを聞き、自分と重ねながら考えを深めていくものと考えられます。アクティビティは、そのきっかけとなるものなので、テーマに応じて様々なアクティビティを使うと効果的です。

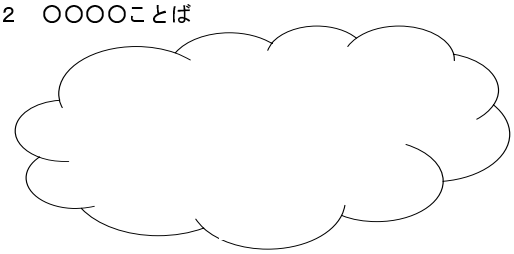
子ども同士のつながりがまだ充分に熟していない段階では、第5段階まで到達しないこともあると考えられます。しかし、粘り強く取り組むことで、教職員がもっている「人権を大切にするんだ、人権侵害は許さない」という熱い思いや態度が子どもたちに伝わり、教室の雰囲気が少しずつ変わっていき、技能・態度が身に付くところまで進むことができるようになるのです。

【ワークシート】

1　○○○○ことば



2　○○○○ことば



3

ここまで述べてきたとおり、自尊感情の醸成や集団づくりに取り組むことは、人権教育を推進する成立基盤となる重要なことです。この取組は、個々の教職員の「人権を尊重する」というゆるぎない気持ちと、「人権尊重の視点に立った学校づくり」（次ページの図　参照）に組織として、チームとして取り組むことによって、より大きな成果を上げると考えます。

子どもたちを取り巻く環境が、人権尊重の精神で満ちていくように、たゆまない取組を続けたいものです。